

# Glocal Tenri



7

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.7 July 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
「多死社会」に備えて  
／高見宇造…………… 1
- ・ 3代真柱様の思い出(2)  
「船遊び」と「仕切り根性」②  
／井上昭夫…………… 2
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち(30)  
「大龍」について①  
／佐藤孝則…………… 3
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相(19)  
戦前のカナダ伝道と日系移民社会②  
／尾上真行…………… 4
- ・ 「おふでさき」の標石的用法(35)  
「やまい」について  
／深谷耕治…………… 5
- ・ 「おさしづ」語句の探求(30)  
「おさしづ」第3巻における「真柱・家族」と「道」  
／澤井治郎…………… 6
- ・ ライシテと天理教のフランス布教(15)  
ライシテの歴史②  
藤原理人…………… 7
- ・ 遺跡からのメッセージ(36)  
文化遺産を今に活かす④ 共同研究「文化遺産と大学キャンパス」の開始  
／桑原久男…………… 8
- ・ 現代宗教と女性(19)  
候補者男女均等法のかたわらで  
／金子珠理…………… 9
- ・ 特別寄稿：追悼文  
嗚呼！芹澤先生  
／佐藤浩司…………… 10
- ・ 思案・試案・私案  
失われる命……“旧優生保護法”  
／八木三郎…………… 12
- ・ 平成30年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ(4)  
第2講：61「廊下の下を」  
／岡田正彦…………… 13
- ・ English Summary…………… 14
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 15  
第55回日本アフリカ学会学術大会参加・発表(森洋明)／第60回印度学宗教学会学術大会に参加・発表(澤井治郎)／『グローカル天理』合本のご案内／平成30年度公開教学講座／『天理教事典 第三版』案内

## 巻頭言

### 「多死社会」に備えて

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

厚生労働省は6月1日、平成29年の人口動態統計を発表した。同年生まれた子供の数(出生児数)は94万6,060人と過去最少になり、2年連続で100万人を割り込んだ。一方、死亡者数は134万433人(前年比3万2,685人増)と戦後最多となった。死亡者数から出生児数を差し引いた人口の自然減は39万4,373人で、過去最大の減少幅となった。前年の減少幅は33万770人で、人口減少も加速している。

このことから、超高齢化社会の次に到来する「多死社会」が予測されるという。これは高齢者の増加に伴い死亡者数が増え、その結果人口が減少する社会形態である。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、日本の年間死亡者数は高度経済成長を支えた「団塊の世代」が90歳代を迎える2037年から2054年にピークを迎え、毎年約166万人が亡くなると予測されている。一人暮らしの高齢者、その年間死亡者が急増する中で、葬儀の担い手がいなくなり、もはや弔いは故人やその家族だけでは支えきれなくなる。最近では葬儀のあり方も変わり僅かな家族で見送り、火葬にする「直葬」が増えている。

これは昨年、私が斎主を勤めた信者の話である。「今、父親が病院で亡くなりました。葬儀をするお金が無いので……。このまま直葬にします」と伝えてきた。彼女は深刻な心の病を抱えながらも二人の子供を産み、夫が亡くなってからは父親の介護と子育てに奮闘してきた。複雑な家庭環境で、本来頼りとする親戚とも縁を切っていた。とにかく「お金が無いので……」と言う。しかし私は「教会が葬儀をする。直葬はやめなさい」と説得した。それは未だ多感な子供のことを考えたからである。「可愛がってくれた祖父の葬儀も出来ない。結局、人間の最期はこんなものか……」と思うのではないか、

それが一番切なかった。「誰も悲しんでくれる人がいない」と人間不信の大人になるのではないかと。急いで遠路、家に駆け付け急造の祭壇を設け、持参した神饌物とお花を供え「みたまうつし」と告別式を勤めさせていただいた。参列者は妻だけであったが、子供たちは玉串奉獻も勤め、ささやかだが立派な見送りが出来たと自負している。

またもう一つの話。近くの病院から「入院患者で葬儀をして欲しいと言う方がおられます」と教会に電話が入った。聞けば高齢のご夫婦で、末期癌で入院している妻の葬儀をして欲しいという夫からの依頼であった。加えて「生活保護受給世帯でお金はありません」とのことである。この方もやはり実子や兄弟とは絶縁しているという家庭事情があった。まさに超高齢化・無縁社会を象徴する話である。聞けば、随分以前に教会に行ったことがあるとのこと。そのご縁からのお願いであった。直ぐに病院に駆け付けたが、後日やんぬるかな「会長さん、有り難う。あとはお願い……」と妻は息を引き取られた。微かな縁であったが、そのご縁に報いなければと公団住宅の集會場で葬儀を勤めた。弔問者はなく参列者はまた私の妻だけだった。後日、一度は切れていた信仰のご縁だが、今度は残された夫の安否が心配で時折様子を伺いに訪ねている。

多死社会が到来すれば、こうしたことは当たり前になるのだろうか。多死社会は元よりその数字だけの問題ではない。私たちの人間観や人生観、そして生き方にも大きな影響をもたらす。徒に無力感に沈んでいる場合ではない。こんな時こそ私たち信仰者は、その中であっても信仰のご縁に繋がる者として心を込めて看取りと葬儀を勤め、そのご縁を大切に世の中に向かって行かなければならないと思っている。